

荒木恵作 「おれのおばあちゃん」

<前編>

- (効果音) (皿がガチャンと割れる音)
- 母 あ～あ、おばあちゃん、またやっちゃって。ちゃんと食べてくださいよ。
- 祖母 ごめんよ。ちょっと手が滑ってしまって。
- 母 ほら正夫！ 早く行かないと学校に遅れるわよ。
- 早川正夫 分かってるよ。じゃあ行ってきます。
- ナレーション おれ、早川正夫。青春高校 3 年生。おれの家族は父と母、そしてこのおばあちゃんの 4 人家族だ。今までは結構幸せな家族だったんだけど、おじいちゃんが亡くなってから、おばあちゃんが少しずつボケ始めてしまった。突然子供みたいになってしまったり、何をしているのか分からなくなったりと、だんだん悪化している。このせいで、家族の雰囲気も前とずいぶん変わってしまった。
- (効果音) (学校のガヤ)
- 友人 1 正夫！ 昨日の宿題考えてきたかよ。
- 正夫 え、何かあったっけ？
- 先生 ほら、もうチャイム鳴ってるぞ。席に座れ！
- 友人 2 起立！ 礼！
- 先生 昨日出しておいた宿題はやってきたか？ 「高齢化社会」について考えてくるとい宿題だったな？ 今から紙を配るから、考えてきたことを書いてくれ。書き終わったらディスカッションをしようと思う。終わった者は持ってくるように。
- 正夫ナレーション おれたちはブツブツ文句を言いながらも書き始めた。おれは、今我が家で起こっている問題について、ありのままに書いた。正直言って、打ちのおばあちゃんみたいなのがどんどん増えたらたまらないという思いだった。
- 先生 今までのを読んでみると、みんなあんまり関心がなかったり、お年寄りには冷たいようだな。でもこれは重大な問題なんだぞ。じゃあ何か意見のある者はいないか？
- 友人 3 灰。高齢化社会って言っても、わたしたちが社会に出てからの話なんだから、今は関係ないと思うな。
- 友人 1 年寄りは、男なら会社を退職したり、女は主婦業を嫁さんに譲ったりで、あとは家でじっと我慢してるんだから、健康なら、ま、いてもいいじゃないの。留守番とかしてもらえるし、時々小遣いもくれるしさ。
- 友人 3 でもこれからは、自分の家だけじゃなくて、国中におじいちゃんやおばあちゃんが増えるんでしょ。そんなのイヤだな。
- 友人 2 自分のおじいちゃんやおばあちゃんだけ面倒見ればいいじゃん。

正夫 それでもボケちゃうから、面倒見切れないし、ウザったいよ。

友人3 だったら、老人ホームに入れちゃえばいいんじゃない？

クラスガヤ 「そうだよな。」「でもさあ…」など。

鈴木徹二 それは違うよ。

ナレーション そう言って突然立ち上がったのは、クラス委員長の鈴木徹二だった。すごい頭の切れるやつで、どちらかと言うと、出来の悪いおれには煙たい存在だったが、何でも去年辺りキリスト教に入ったらしいというわさだった。彼の真剣な顔を見て、教室がシーンとなった。

徹二 お年寄り、いくらボケていたって、おれたちのおじいちゃんだし、おばあちゃんなんだよ。戦争ですごい苦労したり、戦後の一番苦しい時を一生懸命働いて、おれたちの親を育ててくれた。そのお陰でおれたち、こんなに恵まれて豊かな生活ができるんだと思う。そしてお年寄りは自分の役目を終えて、おれたちの成長を見守ってくれてる。おれはお年寄りってありがたい存在だと思う。それに、いろんな無理をしてもう体も弱ってる。だからおれたち、できるだけお年寄りに親切にして、一緒に仲良く生きていかなくちやダメなんじゃないかな。

ナレーション みんな、その気迫にしばし無言だった。おれも正直言って心を刺された。でも一方では、もう一人の自分が、「そんなの、ボケ老人が家族の中にいないやつが言う言葉だ」とつぶやいていた。

正夫 ただいま。

母 あ、お帰り。遅かったのね。

正夫 運。自習室で復習してたから。

母 そう。あと少しなんだから、頑張らなきゃね。

正夫 分かってるよ。おやじは？

母 ちょっと寄る所があつてね。今日は遅くなるそうよ。

ナレーション おれは少しの間、ソファの上でボーっとしていた。

祖母 正夫、今日は何日だっけね。

正夫 7日だよ。朝も言ったろ。

祖母 そうだったかね。最近すぐ忘れてしまうんだよ。そうそう、わたしの眼鏡はどこに行ったかしらね。

正夫 そこだよ。そこ！流しのところ。自分で置いたんじゃないか。まったく、しっかりしてくれよ。

祖母 ごめんよ。すぐ忘れてしまうんだよ。

ナレーション 本当に一段とボケが悪化したようだった。ついさっき置いたばかりの眼鏡を、どこにおいたか忘れるんなんて。それからは、一日一日とボケが悪化するのが目に見えて分かってきた。おれに知っているおばあちゃんは、虫取りに連れて行

ってくれたり、いろんな昔話をしてくれたり、おれの誕生日にはおはぎを作ってくれたりした、優しい元気なおばあちゃんだった。

正夫モノローグ ナレーション こんなおばあちゃんは、おれのおばあちゃんじゃない。そんな気持ちを振り切るように、おれは受験勉強に精を出した。学校から帰るとそのまま予備校に行き、閉館時間になるまで勉強していた。もちろん家に帰りたくないと言うより、おばあちゃんと顔を合わせたくなかったからだ。

父 正夫。最近、帰りが遅くないか？

正夫 そうかな。最近集中力が付いたみたいで、閉館時間まで、つい勉強しちゃうんだよ。

母 そうなの。でもなるべく早く帰ってらっしゃいね。

正夫 分かってる。今度予備校で模擬テストがあるんだ。その成績で高嶺大学にいけるかどうか、分かるんだよ。

父 そうか。頑張れよ。

ナレーション そんなのウソだった。模擬テストなんかどうでもよかった。ただ家にいたくないだけなのだ。その時、おばあちゃんがおれを呼んだ。

祖母 正夫。あとでおばあちゃんの部屋においで。

正夫 何だよ。おれ、テスト勉強しなきゃいけないし。

祖母 ちよつとだけだよ。

ナレーション おばあちゃんは、おれの言葉を無視するようにそう言うと、さっさと自分の部屋に行ってしまった。一瞬、「呼んだことも忘れるんじゃないか」と思ったが、なぜかいつもと違うおばあちゃんのような気がして、おれはおばあちゃんの部屋へ行って見た。

正夫 何だよ、ばあちゃん。

祖母 ま、そこへお座り。正夫、お前、将来何になりたいんだい？

正夫 何だよ、急に。

祖母 何になりたいんだい？

正夫 そんなの分かんねえよ。

祖母 じゃあ、何のために大学に行くのかい？

正夫 そりゃあ、大学卒業したほうがいい会社に入れるし、それに、さんざ受験で苦労してんだから、社会に出る前にラクをして遊びたいしさ。

祖母 そうかい。お前は将来、何になりたいかも分からず、そんな安易な目的で大学に行くのかい。

ナレーション そう言ったおばあちゃんお顔は、何とも言えず悲しそうだった。おれは、そんなおばあちゃんを初めて見たような気がした。

祖母 正夫。今からでも遅くない。自分のやりたいことや、何になりたいのかをよく考えてごらん。

ナレーション 部屋に戻ったおれは、しばらく考え込んでしまった。こんな言葉は、おやじにもおふくろにも言われたことがない。厳しくて、しかも怖いほどに的を突いていた。朝になってガラスが割れる音で目覚めたおれは、台所に行ってみた。

(効果音) (ナレーションのバックで)

母 (ため息)おばあちゃん、またやっちゃって。しっかりしてくださいよ。

ナレーション 今、目の前にいるのは、いつものボケたおばあちゃんだった。口の周りを卵の気味だらけにし、テーブルにはご飯やお味噌汁がこぼれている。見苦しく汚らしい、いつものおばあちゃんだった。昨日のおばあちゃんはどこへ行ってしまったのだろうか。

その日、いつもより早く帰ってきたおれを、父が話があるといって呼んだ。

父 正夫。実はおばあちゃんのこと、いろんなどころに行ってきた。

正夫 もしかして老人ホーム？

父 うん。お母さんもおばあちゃんの面倒を見るのは大変だろ。

母 もういい加減疲れちゃったわ。正夫が学校、お父さんが会社に行っちゃうと、家にはいるのはわたし一人でしょ。だから、結局おばあちゃんの面倒を見るのはわたしだけなのよ。

父 それに、正夫は受験生だからな。こういう環境じゃ勉強できないだろ。

正夫 そうさ。だから予備校が閉館するまで勉強してたんだ。家じゃ勉強できないからね。おばあちゃんが老人ホームに行ってくれれば、心置きなく勉強ができるよ。

(効果音) (ガラスの割れる音)

ナレーション その時、台所でガラスの割れる音がした。慌てて行ってみると、おばあちゃんのコップが割れていた。

母 もしかしておばあちゃん、今の話聞いてたんじゃ…。

ナレーション 心配になって部屋のほうへ行ってみると、案の定、おばあちゃんはいなかった。

父 追いかけてくちや。

ナレーション 父は、慌てて外に出て、おばあちゃんを捜し始めた。おれも父に続いて外へ飛び出していった。捜している最中に、予備校帰りの徹二に会った。

徹二 おい正夫、どうしたんだよ。そんなに慌てて走ってきて。

正夫 うちのおばあちゃんが逃げ出しちゃったんだよ。

徹二 何で？

正夫 おれたちが、おばあちゃんを老人ホームに入れようかって話しているのを聞いてちゃったらしいんだ。

徹二 何？じゃあ、おれはこっちを捜すから、お前、そっちを捜せ！

ナレーション 当のおれがびっくりするほど、徹二は真顔になって協力を申し出た。おれたちは手分けして暗やみの中に駆け出していった。一抹の後ろめたさと不安で、おれの胸の中は締め付けられるようだった。

(音楽) (不安そうな音楽)

<後編>

徹二 正夫！ 早く来い！

正夫 いたのか？

徹二 (小声で)シー！ そこだよ、そこ。

ナレーション そういつて徹二が指差したのは、小さい公園の砂場だった。耳を澄ますと、おばあちゃんのしゃべる声が聞こえた。辺りにはだれもいない。それはおばあちゃんの独り言だった。

祖母 どうとう老人ホーム行きになってしまったよ、おじいさん。覚悟はしてたんだけどね。でも、いざ本当に行かなくてはならないと思うと、やっぱり怖いんだよ。今までも、自分で物忘れが激しくなったことは分かってたんだ。それが分かった時、何度も死にたいと思った。眠ったまま、二度と目を覚ましたくないと思った。でも自分では死ぬ力もない。おじいさん、助けておくれ。わたしもあんたのところ連れてっておくれよ。

ナレーション 胸がツーンとして痛かった。そこへ駆けつけた父に、おれは今聞いたおばあちゃんの独り言を話した。それを聞いた父の目は、心なしか潤んでいるようだった。次の日、学校で――。

正夫 徹二、昨日はありがとう。

徹二 よかったよ、見つかって。あのあとどうだった、おばあちゃん？

正夫 うん。落ち着いてたよ。

徹二 そうか、よかった。正夫、今日放課後、時間あるか？

正夫 あるけど。

徹二 連れて行きたいところがあるんだ。じゃ放課後な。

ナレーション 連れて行かれたところは、学校から 30 分くらい歩いたところだった。

正夫 ここは？

徹二 老人ホームだよ。「望みの園」っていうキリスト教主義のホームなんだ。

正夫 そうか。お前、クリスチャンだもんな。

徹二 ああ。じゃ入ろうか。

正夫 ちよ、ちよと待てよ。入ろうって言ったって…。

徹二 大丈夫。おれ、ここでボランティアやってんだ。

正夫 くっせー。何のにおいだ？

徹二 おっこだよ。一人でトイレに行けなくて、オムツをしている人が多いからね。それに、寝たきりでベッドにそのまましちゃう人もいるし。

正夫 そうなのか。大変だなあ。

徹二 だから家族は面倒くさがって、すぐ入れてしまうんだよ。

ナレーション おれは、徹二がこの前、クラスで言ったことを思い出していた。

正夫モノローグ こいつは、この現実を知りながら、いや、その真ただ中で奉仕活動しながら、ああ言い切ったのか。徹二、何てやつだ、お前は…。

徹二 こんにちは、おじいさん。ご気分はいかがですか？

老人 ありがとうございます。とってもいいよ。えーっと、君はだれかな？

徹二 徹二です。て、つ、じ。

老人 徹二君か。初めまして。今度皆で山登りに以降と思うんだが、一緒に行くかね。

徹二 はい、よろしくお願いします。

正夫 知ってるおじいさんなのか？

徹二 うん。半年前に知り合ったのさ。

正夫 半年も来てるのに、お前の顔を忘れちゃうのか？

徹二 あの人は痴呆症が激しいんだ。おれが来たばかりのころは、もっとよかったんだけど。

正夫 山登りっていうのも、もしかしたら…。

徹二 そう。自分の作った空想の世界なんだ。でもあのおじいちゃんには“現実”なんだよ。

ナレーション おれが今までに想像することすらなかった世界が、目の前にあった。

正夫モノローグ …老いるって、老いて生きるって、こういうことなのか…。

木元医師 やあ徹二君。来てたのかい。

徹二 こんにちは。みんな元気そうですね。

木元 ああ。みんな元気だよ。もつとも、先週また一人、亡くなられたけどね。こちらの方は君の友達かな？

徹二 はい。同じクラスの早川君です。

正夫 早川正夫です。

木元 初めまして。この老人ホームの医師をしている木元です。

ナレーション おれは、木本先生にホームの中を見せてもらいながら、いろいろな話を聞いた。

木元 ここにいる人のほとんどは、痴呆症なんだ。だから、今日やったことは明日には忘れてる。いや、さっきやっていたことも今はもう忘れてるんだ。

正夫 そういう人たちが一人暮らしなんてしたら、危ないですね。

木元 そう。だから老人ホームに入れられてしまうんだよ。でもお年寄りの気持ちは、やっぱり家にいたいんだな。

正夫 だからって、家族と一緒に過ごすのも大変ですよ。毎日、食器は割るし、物忘れは激しいし…。

木元 確かにそうだと思う。じゃあ正夫君は、そんなお年寄りをどう思う？

正夫 正直言って、恥ずかしいと思います。うちのおばあちゃんみたいに、体は大きい

のに、頭はまるで幼児みたいなのを見ていると。

木元 それは誤りなんだよ。痴呆症というのは、がんとかエイズと同じで重い病気なんだ。

正夫 がんやエイズと同じ？

木元 そう。今のところ、20人に1人の可能性でなると言われている。脳の細胞、特に記憶細胞の一部が少しずつ壊れていってしまうんだ。だから痴呆症特有の症状を見ていると、本人も周りの者も「もう何もかもだめになった」と思ってしまいがちだよ。ただいくら頭がはっきりしてなくても、記憶が確かでなくても、“感情”だけは昔のままなんだよ。うれしさも、悲しさも皆分かるんだ。だから、家族みんなが守ってあげなきゃいけない。一人一人がだよ。その方を避けたり、寂しい思いをさせたりするのが一番痴呆症を進ませるんだ。君も、おばあちゃんのお気持ちをその身になって考えてあげられるといいな。時が残されているうちにね。

ナレーション その時おれは思い出していた。部屋に呼んで、真剣におれの将来を心配してくれたおばあちゃん。公園で寂しそうに、死んだおじいちゃんに話しかけていたおばあちゃんを――。

先生は、帰る時、小さな聖書をくれた。おれたちは先生にお礼を言い、老人ホームをあとにした。

正夫 ありがとう、徹二。何て言ったらいいか分からないけど、おばあちゃんに対しての気持ちが、少し変わったような気がする。

徹二 よかった。

正夫 でもお前は、家族の中に痴呆症のお年寄りもいないのに、どうしてこんなに熱心なんだ？ クリスチャンだといっても、よりによってさ。

徹二 実は、いたんだよ、2年前までは。おれのおじいちゃんは、おれが中2の時からボケ始めた。最初はよかったんだけど、そのうち激しくなって…。突然いなくなっちゃうのなんてしょっちゅうだったよ。2年前に、おじいちゃんの面倒を見切れなくなってさ。老人ホームに入れようって話になったんだ。おれはもちろん大賛成だったよ。だから今までの正夫の気持ちが分かるんだ。

正夫 そっか。それで、おじいちゃんを老人ホームに入れたのか？

徹二 そのつもりで話は進められていた。ある晩、おれ、おじいちゃんとロゲンカしちやったんだよ。その時、「おじいちゃんなんか、老人ホームへさっさと行っちゃえ！ “って言っちゃったんだ。そしたらお前のおばあちゃんと同じように、飛び出しちゃって。一晩中家族で捜したんだけど見つからなかった。次の日、おじいちゃんは電車にはねられて死んでた。

正夫 …そうだったのか。それでお前、おばあちゃんがいなくなった時、必死で捜してくれたのか。

徹二 ああ。同じ思いさせたくないからな。おじいちゃんが亡くなってしばらく、おれは落ち込んでたよ。「おれがおじいちゃんを殺したんだ」って。そんな時、たまたまあそここの老人ホームを通りかかって眺めてたんだ。そこのお年寄りたちをさ。そしたら、木元先生が声をかけてくれて、いろいろ話してくれた後、お前ももらったそれをくれた。

正夫 聖書か。

徹二 そう。おれは無我夢中で読んだよ。それがきっかけで、教会にも行くようになった。そして分かったんだ。

正夫 何が？

徹二 おれはおじいちゃんにひどいことをしたけど、そんなおれのことを神様は赦し、愛してくれてるんだって。だからおれがおじいちゃんに優しくしてあげられなかった分、ほかのおじいちゃんたちには精一杯のことをしようって思ったのさ。

あ、そうだ。聖書開いてみろよ。そのしおりが挟んであるところ。

正夫 ん？ ああここか。線も引いてある。

徹二 おれも同じところを教えてもらったんだ、先生に。「愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、(途中から正夫も一緒に読む)私たちもまた互いに愛し合うべきです。」

なあ正夫。イエス様が十字架で命を捨てるほどに愛されたってことが、おれはあのホームで、一人一人のお年寄りをありのまんまで受け入れて、介護しているうちに、少しずつ体で分かってきたような気がする。正夫、お前にはまだおばあちゃんがいるんだ。かけがえのない、世界でたった一人のおばあちゃんが。大事にしてあげろよ。木元先生が言ったように、「時が残されているうちに」な。

正夫モノローグ 「時が…残されているうちに…」

ナレーション そう言うなり、おれは駆け出していた。おれのおばあちゃんが待っている家に。

<完>